

新聞を活用した「自らの生き方を考える力」の育成

～NIEの活動と「読書の学校づくり」～

兵庫県播磨高等学校 校長 摺河 祐彦
教諭 西村 彰範

1. はじめに

兵庫県播磨高等学校は、姫路市の中心部 JR 姫路駅の南 200 ㍍に位置し、JR の駅からのアクセスでは県下で 1、2 を競う近さである。そのため通学区域は、東は明石から西は赤穂まで、北は小野市や宍粟市に南は家島からと、まさに名は体を表すがごとく、校名のままに播磨一円に広がっている。その広範な地域の要求に応えるべく、創立以来一貫して有能な女子の育成に携わっている伝統校であり、6 年後の創立百周年の佳節に向けて学校では、「百周年構想委員会」が設置され、すでにさまざまな取り組みが行われているところである。

2. 「読書の学校づくり」

その委員会の中でも大事な柱の一つとして、日本一の読書の学校づくりを目指す「読書の学校づくり」委員会が設置された。そして早速、全校挙げて朝の SHR の時間に 10 分間の「朝の読書」に取り組み、本年度 5 年目を迎え、すっかり軌道に乗ってきている。さらにこの委員会では、本校独自の推薦図書 100 冊を選定し、「播磨の百冊」として全校生に紹介した。また本校の部活動には、他校にもあるような創作活動を中心とした文芸部の他に、図書部という、生徒会の図書委員会から独立した部活動があり、その上、部員同士で読書会を中心に作品を鑑賞したり意見を交換したりする読書部という部活動もある。このように本に関係した部活動が三つもある学校は全国的に

も珍しい。平成 25 年度、本校が NIE 実践校として指定を受けた際に、こうした現状を踏まえて、他校の実践事例とは異なる、本校の独自性を生かした実践に取り組むことにしたのである。

3. NIE 活動と「読書の学校づくり」

それは、これまでの NIE の取り組みに多く見られた、既存の新聞をそのまま活用するのではなく、「読書の学校づくり」の基本となる本校推薦図書「播磨の百冊」を、全校生に紹介し、読んでみようというきっかけを与えるための、媒体としての新聞づくりである。さらに、先に述べたような本校の特色ともいえるべき、書物に係る三つの部がプロジェクトチームとして共同で取り組むことで、より広がりのある活動にする狙いがあった。

4. 1 年目の取り組み

こうして実践校としての取り組みが始まったわけであるが、他に実践例がないだけに具体的な方策をめぐっては、委員会としても議論を重ねた結果、当面直前に控えていた本校の文化祭である秋の学芸発表会に、播磨の百冊をすべて実物で展示し、簡単なポップを付けて紹介した。しかしこれだけでは、労多くして効少なしで、せっかくの NIE の活動としては、残念ながら物足りなさを感じさせるものであった。ただ図書部では、これまで通り「図書だより」を毎月発行し、新刊本を中心にあらすじを紹介する形で発行していた。こ

の「図書だより」を契機に本格的に取り組もうとしていた時、NIEの記者派遣事業があり、毎日新聞の島津忠彦姫路支局長を講師としてお招きし、三つの部の部員全員を対象に講義をしていただいた。当日は、講義に続いてワークショップも行ったが、懇切丁寧に指導される支局長に答えるように、生徒たちも熱心に聞き入り、予定を大幅にオーバーして終わった。早速、翌日から三つの部の部員を4、5人のチームに分け、アドバイスを参考に「播磨の百冊」の紹介新聞作成に取りかかった。タイトルはシンプルに「播磨の百冊」を省略した「はりひやく」とした。

こうして創刊号から第4号まで、20冊分を紹介する「はりひやく」が一通り完成した。そして新年度の5月にずれ込んでしまったが、創刊号と「播磨の百冊」の一覧表も合わせて全校生に配布した。さらにカラーで華やかに制作されている原稿は、図書室に展示した。



「はりひやく」創刊号

5. 2年目の取り組み

2年目に入って、当初「はりひやく」は月2、3回の発行とし、1号につき5冊を紹介することにして、今秋の学芸発表会までに、何とか百冊すべて紹介し終える計画であった。しかしながら、2巡目になると

まだ読んでいない作品を担当する部員も出始める。そのため班の中でも作品によって取りかかりがそろわなくなった。そうになると、三つの部がそれぞれの活動日を調整しながら班ごとに集まってミーティングする機会を設定することが困難になり、足並みが乱れたまま1学期を過ごしてしまった。

そんな事情もあって、もう一度体制を立て直す意味でも、本年度の記者派遣事業は、夏季休業中に実施させていただくことにした。

6. 本年度の記者派遣事業

8月6日(水)本校において、兵庫県NIE推進協議会事務局より山崎整事務局長をお招きして記者派遣事業が実施され、前出の3部合同による「はりひやく」プロジェクトの各チームの代表を中心に、26人の生徒が参加した。テーマは「新聞記事のためのインタビュー入門」と題して、約2時間にわたってインタビュー記事の作成について学んだ。最近の生徒は、特に女子は総じてイラストが上手である。例に漏れず、プロジェクトチームのメンバーの中にも得意な生徒が1人は必ずいて、紙面のレイアウトとなると、自作のイラストのカットがふんだんに散りばめられている。とは言っても、百冊の本を毎回毎回ワンパターンな紙面で紹介を繰り返しては、読者の関心は引きつけられない。当然のことながら紙面の工夫は新聞づくりの基本である。生徒たちにはそのことを、まさに身をもって知る有意義な時間となった。

講義は、山崎事務局長が新聞記者時代に実際に執筆された原稿を教材に、インタビューのノウハウ・ドゥハウについて熱く語

られ、2時間がとても短く感じられた。その教材に当たる資料も、具体的に書き込みが随所にされていて、大変分かりやすいものであった。生徒たちも、自分たちだけで全部読もうとすると時間がかかって大変だが、第三者の力を借りてもいいわけで、むしろその方がより客観的な記事になり、読者の関心も集めることに気がついたようだった。何よりも、記事は机の上だけで書くものではない、足を使い、現場の人と向き合い、心を開いて集めた材料を用いて書くものだということを、山崎氏の気迫のこもった言葉の中から感じ取ることができた。



記者派遣事業を伝える記事（神戸新聞）

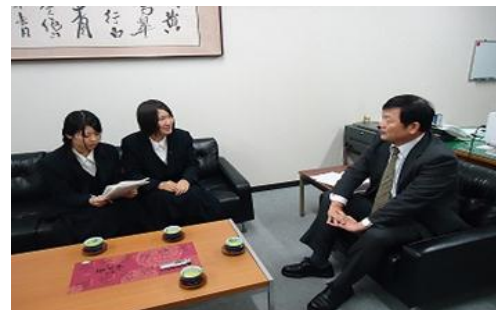
こうして、暑い夏に学んだ貴重な体験を生かすべく2学期に入ると早速、11月に開催される本校の文化祭である学芸発表会の準備に取り掛かった。三つの部がそれぞれ取り組む展示とは別に、「はりひやく」プロジェクトメンバーが2人ペアになり、来場された外部の方々にインタビューをして、「播磨の百冊」の中からお薦めの作品を答えてもらおうというものである。直前には

自分の部の展示もあって多忙を極めたが、お互いに役割分担して練習をし合っていた。当日は雰囲気を出すためにインタビュアーにマイクとレコーダーを持たせ、もう1人がメモを取るようにしたので、最初はインタビュアーの方がかえって緊張する場面もあったが、慣れてくるにつれて来場者とのやりとりもスムーズに行われるようになった。来場者の方々には突然のインタビューではあったが、皆さん本当に協力的で快く応じていただいた。生徒たちにとっても普段は読書中心の部活動しかしていないだけに、これまた貴重な経験となった。

そして、今回の派遣事業のメインとも言うべき、市内の著名人からも「播磨の百冊」の中からお薦めの1冊を紹介していただくために、姫路市教育委員会の中杉隆夫教育長にインタビューをお願いし了承していただいた。

7. インタビュー記事の実践

11月26日（水）放課後、「はりひやく」プロジェクトメンバー2人が姫路市教育委員会に中杉教育長を訪問し、インタビューを実施した。



中杉教育長へのインタビュー

事前に教育長の経歴や仕事内容を調べ、綿密にシナリオを作成して臨んだ2人だったが、やはり実際にはシナリオ通りにはい

かないもので、もちろん2人にとってもその点は想定内のこととして臨機応変に対応できていた。中杉教育長も快く応じていただき、予定の時間を大幅にオーバーして1時間近くに及んだ。「はりひやく」の中からの推薦はもちろんのこと、それ以外にもたくさんのお本を、あらすじを交えて紹介していただいた。インタビューした2人の生徒も、話に引き込まれてお互いの質問の役割分担を忘れてしまうほどだった。終了後は、すっかり触発された様子で、早速、紹介された本を読みたいと、終了後の感想に記していた。

その後は、記憶の新しいうちにメモを整理しながら、不明な部分は録音したテープから起こして記事の作成に取りかかったわけだが、1時間にも及んだ内容だけに、どうまとめるか大変苦心していた。レイアウトは班の他の生徒に任せるとしても、インタビューの内容は、やはり当事者がするしかない。結局、冬休みに入ってまさに年末年始返上で取り組み、休み明けようやく力作が仕上がった。一度のインタビューにもこれだけの時間と労力を費やすことを、身を持って知ることになったわけだが、完成した「はりひやく」を手にしたメンバーたちの顔は、充実感にあふれていた。



インタビュー記事を掲載した「はりひやく」

8. おわりに

こうして2年間の実践校としての取り組みを終えたが、振り返ってみれば、「もっと時間をかけて取り組みたかった」との感が残った。それはもちろん、中心にあった担当者が、工夫して時間を作り出せばよかったわけで、今回の一番の反省点でもある。

ただ、言うまでもなく、これでNIEの活動が終わるわけではない。むしろ、これから腰を据えて取り組めばいいのである。本校にとっても実践校として指定を受ける2年前と今では、明らかに違う。月並みな表現だが、やってみれば、あらためて良さが分かる。

今回「はりひやく」プロジェクトチームに参加した三つの部活動の生徒たちにとっても貴重な体験となった。彼女たちのような感受性豊かな時期に、自ら体験し味わった新鮮な感動は、これからの「学び」に迷うことなく取り組むための原動力となる。そして何より、仲間と議論を交わし、プロから直接学び、一般の方々にインタビューし、手作りで新聞の作成に取り組んだことが、将来にわたって生きる力となる「コミュニケーション力」を養う機会となったに違いない。

このような機会を与えていただいた兵庫県NIE推進協議会に心から感謝して、実践報告としたい。